

唐代における詔獄の存在様態（上）

室 永 芳 三

目 次

はじめに

一 裁判制度と勅命刑獄の形態

(1) 中書門下の三司会審

(2) 御史台の別勅推事

二 唐前半期の詔獄の存在様態

(1) 則天武后朝の詔獄

(2) 中宗・玄宗朝の詔獄

三 唐後半期の詔獄の存在様態（以下次号）

(1) 肅宗・代宗朝の詔獄

(2) 徳宗・憲宗朝の詔獄

(3) 唐末の詔獄

おわりに

はじめに

詔獄は早く漢代にみられる⁽¹⁾。詔獄とは、資治通鑑卷三十二・前漢紀・成帝・綏和元年冬十一月の条の「洛陽詔獄」の胡註に、「凡詔所繫治。皆為詔獄」とあるように、勅命によって繫獄せしめられたものをいい、しばしば天子の恣意による濫刑の事例とともに、漢代以後の王朝にも少なからずみえている⁽²⁾。唐代における詔獄の初見は、管見の限りでは、則天武后朝である。則天武后が仮借ない厳法を用いて、世人に「武后の忍」（「廿二史劄記」）と呼ばれたことは、周知の如くであるが、その苛刻な政治は、詔獄の上に組織されていたのである。由来、詔獄は天子の擅殺権が直截的に行使された刑獄機関であるが、明の邱濬の大学衍義補卷百十三・慎刑憲・戒濫縱之失の項に、玄宗の天宝初に宰相李林甫が大獄を起こして反対者を排除した記事のをせ、

臣按。国家置為刑獄。有一定之名。有一定之所。祖宗成法。子孫當遵守之。不敢有加焉。可也。漢唐以來。乃有詔獄之名。及有起大獄者。是於常憲之外。而更為之異名。

以羅人於死地。所以張奸臣之威。先天下之心。皆由乎此。後世人臣。有請於祖宗。常獄之外。別起獄者。必奸邪也。人主宜痛斥之。

とあるように、時に奸臣によって盗用される場合があったのである。

唐代において、則天武后朝の詔獄は、彼女の権力闘争と密接に結びついて現われている。玄宗朝の詔獄は、宰相李林甫が権力を得んとして、政治的にこれを利用したものであった。肅宗・代宗に続く徳宗・憲宗朝の詔獄は、安史の乱後の帝権の強化と中央集権制の方策に重大な意味を持つものであったと考えられる。そして唐末のそれは、宦官の勢力拡大と連関

しているのである。つまり、詔獄の背後には、天子の専権をめぐる政治史の動きが横たわっていることを見逃してはならないであろう。

小論では、詔獄が律令裁判制度の中で、どのように組織され、その機能が政治史の推移とどう関わっていたかに重点を置いて考察し、詔獄の独自の様態を検出することによって、その持つ歴史的 성격の一側面を解明してみたいと思う。大方の御叱正を乞う次第である。

一 裁判制度と勅命刑獄の形態

唐の裁判制度の根本は、律令という法体系の上に運営されたことにある。律令による運営とは、法をもって天下を治めるという公権主義的立場をとることであり、天子といえども自らの恣意をつとめて抑制して、公法を遵守することが要請されたのである。旧唐書卷七十・戴胄伝に、

貞観元年。遷大理少卿。中略。時朝廷。盛開選舉。或有詐偽資蔭者。帝令其自首。不首者罪至于死。俄有詐偽者事洩。胄挾法斷流。以奏之。帝曰。朕下勅。不首者死。今斷從流。是示天下以不信。卿欲免獄乎。胄曰。陛下當即殺之。非臣所及。既付所司。臣不敢虧法。帝曰。卿自守法。而令我失信邪。胄曰。法者國家所以布大信於天下。言者當時喜怒之所發耳。陛下發一朝之忿。而許殺之。既知不可。而實之於法。此乃忍小忿。而存大信也。若順忿違信。臣竊為陛下惜之。帝曰。法有所失。公能正之。朕何憂也。

とあり⁽³⁾、太宗の貞観元年、選挙の時に資蔭を詐偽して官を得んとしたものに対して、自首しないものは死罪との勅が下されていたが、大理少卿戴胄は、法にもとづき流罪としたため、太宗が既に下した勅旨を変えるのは天下に不信を与えるというのを退け、陛下が直ちにこれを殺したのであれば自分の及ぶ所ではないが、既に大理寺に付したのであるから、法を曲げることはできぬとし、法は国家の大信を天下に布くゆえんであると諫言し、太宗をして遂に翻意せしめたことがみえているのは、これを知る好例である。こうした事例は、その他にも数多くみられる⁽⁴⁾。しかし、池田温氏が「皇帝の立法権・断罪権が律令を超越せる絶対性を有する点は、そこでは当然の前提とされている。しかも皇帝は自らの恣意をつとめて抑制し司法官の遵法を達成せしめるところに、帝王大権に対する一般的要請が存したのであり、それは当代の為政者の自覚するところであった」と指摘せられている如く、つきつめると法の運用が天子の意志に依存したことは、旧来と変わるところはなかった。ただ唐代の場合、律令体制を整えた太宗が、極めて寛仁であり、刑法も慎重であったため、裁判の制度上において、少なくとも形式的には天子は法を遵守し、その擅断を抑制せんとする基調があったことも確かである⁽⁵⁾。

唐の裁判機構は、周知の如く、唐初は大理寺と尚書刑部の司法官庁を中心に構成されていたが、間もなく中書門下が加わり、三者によって中央朝廷の裁判が運営されたのである⁽⁶⁾。唐会要卷四十一・雜記・広徳元年七月十一日の勅節文に、

応天下刑獄。大理正断。刑部詳覆。下中書門下處分。

とあって、三者相互の間の審級管轄が適確に表わされている。獄官令によれば、大理寺は官人に対しては徒罪以上、庶人に対しては流罪以上に当る裁判を断決し、官人の徒刑・庶人の流刑は尚書刑部の詳覆をへて決定するが、流罪以上および除免官当を断じた場合は、断案を尚書刑部に送申するのである。尚書刑部はこれを覆審し、法理に妥当すれば、天子

に申奏して事件を終結せしめ、もし妥当せざる場合には、刑部が再審した。そしてこの尚書刑部の上に、更に中書門下が置かれて死刑に当る重罪事案を覆審したのである⁽⁷⁾。

（1）中書門下の三司会審

所で、裁判機構は、こうした下級審の断案を上級審が覆審するという審級制に従って運営され、重罪事案は最終的な決定者である天子に送られたのであるが、逆に天子が勅命をもって刑獄を掌らしめる場合、どのような形式が用いられたのであろうか。最高の権力者である天子は、自らの意志で刑獄官を任命し得るわけであるが、整った律令裁判下では、自らそこに定まった形態があったと思われる。そこで実際に文献にあたって、太宗及び高宗がどのような方式を用いたかをみてる。資治通鑑卷百九十五・唐紀・太宗・貞觀十四年十二月丁酉の条に、

侯君集之破高昌也。私取其珍宝。将士知之。競為盜竊。君集不能禁。為有司所劾。詔下君集等獄。中略。並付大理。云云。

とあり、詔して獄に下した侯君集の場合は、司法官である大理寺に勅付して審理せしめている⁽⁸⁾。また、同書卷百九十七・唐紀・太宗・貞觀十七年夏四月庚辰朔の条に、

紇于承基上變。告太子謀反。勅（司徒）長孫無忌・（司空）房玄齡・（特進）蕭瑀・（兵部尚書）李勣・（御史大夫馬周）与大理・中書・門下參鞠之。反形已具。上謂侍臣。將何以処承乾。群臣莫敢对。通事舍人來濟進曰。陛下不失為慈父。太子得盡天年。則善矣。上從之。（廢承乾為庶人。徙黔州）

とあり⁽⁹⁾、その胡註に、

唐制。凡国之大獄。三司詳決。三司謂給事中・中書舍人与御史參鞠也。今令三省与大理參鞠。重其事。

とあって、太宗の貞觀十七年の皇太子の謀反という大獄の審理には、重臣および中書・門下の行政官と監察官の御史台、更に大理寺に勅付したことがみえており、註として、大獄の審理には給事中・中書舍人と御史の三司が当たるが、極めて重大事件に際しては、門下・中書・御史台三司の他に、大理寺も参加すると記されている。また、旧唐書卷八十六・章懷太子賢伝に、

調露二年。明崇儼為盜所殺。則天疑賢所為。俄使人發其陰謀事。詔令中書侍郎薛元超・黃門侍郎裴炎・御史大夫高智周与法官推鞠之。於東宮馬坊。搜得早甲数百領。乃廢賢為庶人。幽于別所。

とあり、高宗の調露二年、同じく皇太子謀反の審理に際しても、中書侍郎・黃門侍郎・御史大夫と法官（大理寺）に勅命が下されているから、事件の処理に政治的配慮を必要とする大獄は、行政官を中心とする中書・門下・御史台の三司と法官の大理寺に勅付して審理量刑せしめる形式が取られたものと思われる。資治通鑑卷二百七・唐紀・則天后・長安四年十二月の条の胡註に、

三司謂尚書刑部・大理寺・御史台也。唐制。大獄。則召大三司考竟。又詔中書・門下同鞠之。

とあって、大獄に際しては大三司が組織されたとみえ⁽¹⁰⁾、それは尚書刑部・大理寺・御史台という法官を中心とする三司に中書・門下が参加するものであるとっている。この尚書刑部・大理寺・御史台の三司については、同書卷二百一・唐紀・高宗・龍朔三年夏四月

乙丑の条に、

下（右相）李義府獄。遣司刑太常伯劉祥道与御史・詳刑共鞠之。仍命司空李勣監焉。とあり、その胡註に、

司刑太常伯。即刑部尚書。詳刑。大理也。唐自永徽以後。大獄。以尚書刑部・御史台・大理寺官雜按。謂之三司。

とあるから、高宗の永徽以後より大獄を掌ることになったのであろう。また、冊府元龜卷五百二十上・憲官部・彈劾の項に、

王義方。顯慶元年。為侍御史。時中書侍郎李義府。聞婦人淳于氏有美色。繫大理。乃諷大理丞畢正義。枉法出之。將納為妾。或有密言其狀者。高宗。令給事中劉仁軌・侍御史張倫。鞠之。

とあり、高宗の顯慶元年の中書侍郎李義府の事件審理を給事と侍御史に命じたことがみえているのである。このように天子の勅命による刑獄は、中書・門下両省官と尚書刑部・大理寺官および御史台官から選ばれ、通常の事件であれば大理寺が処理し、事件が大きくなれば複数の刑獄官が任命されたことがわかる。その代表的な形態が大三司あるいは三司と呼ばれるものであった。そして注意すべきは、こうした三司の合議審理の制度が、実は尚書刑部の上に置かれた中書門下の裁判組織であったことである。中書門下が尚書刑部の上に置かれ、死刑を審議するようになるのは、唐六典卷六・尚書刑部・刑部員外郎の条の「凡決死刑。皆於中書門下詳覆」の註に、

旧制皆於刑部詳覆。然後奏決。開元二十五年勅。以為庶獄既簡。且無死刑。自今已後。有犯死刑。除十惡死罪・造偽頭首・劫殺・故殺・謀殺外。宜令中書門下。与法官等。詳所犯輕重。具狀聞奏。

とあって、玄宗の開元二十五年の勅以後のこととしているが、この中書門下は、いわゆる中書省と門下省の両省のことではなく、開元十二年に中書令張説の意見によって中書門下と改称された政事堂を示すのであろう⁹⁹⁾。なお、中書・門下両省が死刑を議することは、太宗朝よりみられたものである。冊府元龜卷百五十一・帝王部・慎罰の項に、

（太宗貞觀）二年三月。帝謂侍臣曰。古者斷獄。必訊於三槐九棘之官。自今大辟罪。皆中書・門下五品已上。及尚書議之。庶無冤濫。

とあり¹⁰⁰⁾、太宗の貞觀二年に死刑の罪の決定に当っては、中書・門下両省の五品以上の者、および尚書省の官が参議したことからも明白である。ともあれ、中書門下の裁判組織は合議制が採用されていた。そもそも中書門下自体が両省の合議体であるが、審議すべき案件によって、これに他官が参加せしめられている。先述の死罪に対する中書門下の詳覆には法官である刑部が参議している。また、唐六典卷六・尚書刑部・郎中員外郎の条に、

凡有冤滯不申。欲訴理者。中略。随近官司斷決之。即不伏。當請給不理狀。至尚書省。左右丞為申詳之。又不伏復給不理狀。經三司陳訴。又不伏者上表。受表者又不達。聽撾登聞鼓。若慜獨老幼。不能自申者。乃立肺石之下。

とあって、裁判に伏せざるときの登聞鼓・肺石にいたる救済手続の中に、尚書省に次いで三司陳訴がみえる¹⁰¹⁾。この三司の構成員は、唐律疏議卷二十四・鬪訟四・越訴の項に、

依令。尚書省訴不得理者。聽上表。受表恒有中書舍人・給事中・御史三司。

とあり、中書舍人と給事中および御史によって構成される。御史は、唐六典卷十三・御史台・侍御史の条に、

凡三司理事。則与給事中・中書舍人。更直於朝堂。受表。

とあり、三司が事を理するのを侍御史の職掌としているから、侍御史が給事中や中書舎人とともに朝堂に分直して上表を受けたと考えられる。しかし、同文に続く註に、

三司更直。毎日一司正受。兩司副押。更通如此。其鞠聽亦同。

とあって、三司は毎日交代で一司が正受となり、他の二司は副押となったとある。とすれば、給事中と中書舎人と侍御史の三者は、その官品は同じであるのが普通である。所が、給事中と中書舎人はともに正五品上であるのに、侍御史は従六品下である。御史台の官で正五品上は御史中丞であるから⁴⁴⁾、三者相互間の身分を同等にするならば、御史中丞がこれに当るべきである。そのことは、唐大詔令集卷八十二・刑法・申理冤屈制（儀鳳二年十一月十三日）に、

前略。百姓雖事披論。官司不能正斷。及於三司陳訴。不為究尋。向省告言。又却付州
縣。中略。見在京訴訟人。宜令朝散大夫守御史中丞崔謐・朝散大夫守給事中劉景先・
朝請郎守中書舎人裴敬彝等。於南衙門下外省。共理冤屈。所有訴訟。隨狀為其勘當。
有理者。速即奏聞。云云。

とあり、高宗の儀鳳二年の三司陳訴の訴訟の処理に当たったのは、御史中丞と給事中と中書舎人の三者であったことから推測される。また、石尾芳久氏は「律令國家の裁判制度」（『日本古代法の研究』所収）の中で、この三司を御史大夫と中書舎人・門下給事中とされ、中書舎人・給事中よりも官品の高い御史大夫によって主宰される法廷であり、常設の最高裁判所たる尚書省よりも優越する裁判所として勅裁裁判所の性格を有したと指摘されている。同氏が御史大夫とされたのは、恐らく六典卷十三・御史台・御史大夫の条に「三司。御史大夫・中書門下。大事奏裁。小事專達」とあるによったものと思われるが、この文章の表現には、幾分混乱がみられるし、いまの所では、三司陳訴の受表に御史大夫が参与した事例は検索し得ない。御史大夫が参与した三司は刑獄審理の場合であったが、旧唐書卷四十三・職官志・門下省・給事中の条に、

前略。凡國之大獄。三司詳決。若刑名不當。輕重或失。則援法例。退而裁之。

とあり⁴⁵⁾、三司が大獄を詳決し、その結果が刑名当らず、輕重を失するものであれば、給事中は別に法令を運用し、覆審して裁く権限を有していたのである。なお、この三司について、通典卷二十四・職官・御史台・侍御史の条に、

前略。又分直朝堂。与給事中・中書舎人同受表。裏冤訟。迭知一日。謂之三司受事。

其事有大者。則詔下尚書刑部・御史台・大理寺。同案之。亦謂此為三司推事。

とあり、先述の三司陳訴の処理にあたったものを三司受事といい、受事の結果が重大な場合には、更に尚書刑部・御史台・大理寺の三司に勅命が下って推案されたことがみえ、これを三司推事といったとある。また、唐六典卷十三・御史台・侍御史の条に、

前略。若三司所按。而非其長官。則与刑部郎中員外郎・大理司直評事。往訊之。

とあり、この三司推事は、それぞれの長官である刑部尚書・御史大夫・大理卿によらないときには、刑部の郎中・員外郎、御史台の侍御史、および大理寺の司直・評事によって構成されたとある。このように中書門下の合議裁判は、三司を中心に運営されていたのであり、そしてその機構はまた、勅命の刑獄をも審理する機関であったのである。

（2）御史台と別勅推事

三司受事および三司推事の両機構で注目されるのは、いずれの機構にも御史が参加して

いることである。御史台は、主として官僚に対する弾劾糾察の機関として設けられたものである。その御史台が受事と推事の両機構に関与したのは、やはり理由があることであろう。それは御史台が三省を頂点とする政治組織とは独立した機関として位置づけられており、官僚が官僚を弾劾糾察するという、官僚の自粛機能を果す機関であったため、通典卷二十四・職官・御史台・侍御史の条に、

大唐。自貞觀初。以法理天下。尤重憲官。故御史復為雄要。云云。

とある如く、唐初より御史台官は重んぜられたが、また一方、天子の耳目として、巨大な官僚機構を常に天子の統制下におくための役割を果たすことが要請されていたものでもあったからと考えられる。従って、天子が裁判の画一性を遵守しようとする場合、勢い側近の御史台を通じて天子の権力意志の浸透を図ることになるであろう。御史台の両三司への参加、特に勅命の刑獄への関与は、こうした傾向が集約整理されたものと思われるのである。この点をもう少し検討するため、御史台に付与されていた刑獄権についてみてみる¹⁰⁰。

さて、唐の御史台には、御史大夫一人、御史中丞二人、侍御史四人、殿中侍御史六人、監察御史十人が置かれ、台中の諸務を分掌していた。このうち刑獄に関与したのは、規定によれば、侍御史であった。唐六典卷十三・御史台・侍御史の条に、

侍御史。掌糾察百僚。推鞠獄訟。

とあり、その職掌に百僚を糾察し、獄訟を推鞠するとある。獄訟とは、いわゆる聴訟断獄である。この聴訟断獄は、御史が関与するものであるから、直接に一般に及ぶものではなくして、官僚の非違に限定されたと思われる。侍御史の職掌内容について、六典と通典の記載に多少の相違はあるが、先の六典には、

其職有六。一曰奏彈。二曰三司。三曰西推。四曰東推。五曰贓贖。六曰理匭。

とあって¹⁰¹、その職務を六つに分別している。このうち聴訟断獄に当るものは三司と西推と東推である。三司とは、前述した三司受事と三司推事の職務であるが、同書卷八・門下省・給事中の条に、

凡天下冤滯未申。及官吏刻害者。必聽其訟。与御史及中書舍人。同計其事宜。

とあり、その註に、

毎日令御史一人。共給事中・中書舍人。受辞訴。若告言官人。事害政者。及抑屈者。奏聞。自外依常法。

とあるから、侍御史の聴訟断獄は、冤滯不告のもの、官人の害政、抑屈に関する申訴を給事中や中書舍人とともに受理し、審議したことになる。

次に西推・東推についてみる。冊府元龜卷六百九・刑法部・総序に、

前略。侍御史。掌推鞠獄訟。謂之東西推。凡有別勅付推者。則按其實狀。以奏。尋常之獄。推訖断於大理。

とあって、東西推は獄訟の推鞠を掌るもので、また、別勅による付推も掌ったことがみえる。資治通鑑卷二百十七・唐紀・玄宗・天寶十三載九月の条の胡註には、

宋白曰。唐故事。侍御史二人。知東西推。又各分京城諸司及諸道州府。為東西之限。

中略。又有監察御史出使推按。謂之推事御史。

とあり、東西推は各々が京城諸司と諸道州府とを分けて東西の区分としたとみえる¹⁰²。そして出使して推按する御史として監察御史もこれに加わり、それを推事御史といったとある。推事御史については、同書卷二百七・唐紀・則天后・長安四年十二月の条に、御史中丞宋璟が揚州・幽州への出使の勅命を拒否したことをのせ、

故事。州県官有罪。品高則侍御史。卑則監察御史按之。中丞非軍国大事。不当出使。云云。

といったとあるから、推按すべき州県官の官品が高いものは侍御史が、低ければ監察御史が出使するのが慣例だったといえる。なお、監察御史の場合は、出使のみでなく、朝廷内においても推鞠に関与していた事例は少なくない。旧唐書卷百・裴灌伝に、

累遷監察御史。時吏部侍郎崔湜・鄭愔坐賊。為御史李尚隱所劾。灌同鞠其獄。云云。とあり、監察御史裴灌と李尚隱が吏部侍郎の坐賊を弾劾、推鞠したことがみえているのは、その一例である⁹⁹。

また、殿中侍御史が出使推按する場合もあった。旧唐書卷七十四・崔仁師伝に、

貞觀初。再遷殿中侍御史。時青州有逆謀事發。州県追捕反党。俘囚滿獄。詔仁師按其事。仁師至州。悉去桎械。云云。

とあり、太宗の貞觀初に殿中侍御史崔仁師が勅命によって青州にて獄事を推按しているのがみえる。こうした勅命による推事が、唐律疏議卷三十・斷獄の「別使推事」の律文に対する疏議に、

別使推事。謂充使別推覆者。云云。

とあり、また、唐大詔令集卷八十二・刑法・高宗・永徽六年十一月の勅文に「法司及別勅推事並依律詔」なるものがあるから、別使推事あるいは別勅推事といわれたのであろう。

所で、御史台の刑獄権と連関して考察すべきものに獄がある。唐六典卷六・尚書刑部・刑部員外郎の条に、

凡京都大理寺。京兆・河南府・長安・万年・河南・洛陽県。咸置獄。其餘台省寺監衛府。皆不置獄。

とあり、中央朝廷で獄の設置が認められていたのは大理寺のみであった。従って、当初は御史台には直属の獄が置かれず、御史台の取扱う罪人は大理寺に繋囚していた。それが太宗の晩年になると、御史台に獄の設置が認められているのである。唐会要卷六十・御史台の項に、

故事。台中無獄。須留問。寄繫於大理寺。至貞觀二十二年二月。李乾祐為大夫。別置台獄。由是。大夫而已下。各自禁人。云云。

とあり、また、通典卷二十四・職官・御史台の項に、

其鞠案禁繫。則委之大理。貞觀末。御史中丞李乾祐。以囚自大理来往。滋其姦故。又案事入法。多為大理所反。乃奏。於台中置東西二獄。以自繫劾。

とある如く、太宗の貞觀二十二年に御史大夫李乾祐は、囚人を大理寺の獄から来往せしめることによって不法が生じ、なお御史台で案事が法に入るべきものを大理寺が反覆してしまうことが多いとして、別に御史台に東西二獄を置くことを奏請し、これより御史大夫以下の御史は、罪人をここに繋囚することとなったとみえているのである。この独自の獄の設置によって、御史台の刑獄権が強化されたことは疑いない所であろう。

これを要するに、御史台の刑獄に関する職能は、単に侍御史のみに限られるのではなく、また、三司の職務上から関与することになったのでもなく、別勅推事や台獄の設置にみられるように、天子の特別な意志と方策によって構成されたとみるべきであろう。つまり、御史台は、実に唐初から、弾劾権とともに断獄・司獄の諸権を併有する特別な刑獄機関として存在し、律令裁判の機構とは一応独立した天子直属の刑獄機関という性格が強く主張されるものであったことを見逃してはならないのである。

なお、今一つ付言しなければならぬことは、御史台における断獄も、大理寺が断案を断定し、刑部が覆審するという律令裁判の手續の原則が貫かれていたということである。先掲の冊府元龜の記事に、「尋常之獄。推訖断於大理」とあり、龍筋鳳髓判卷一に、

通事舍人崔暹。奏事口誤。御史彈付法。大理断笞三十。徵銅四斤。云云。
とある如くである。しかし、それも時代が降ると変化することになる。唐会要卷六十二・御史台・推事の項に、

太和二年閏三月。中書門下奏。御史台推事。縱有特宣。亦須正勅。應朝官犯罪。准獄官令。先奏後推。格式具存。合共遵守。云云。
とあって、唐末になると、その原則の維持が強く要請されていることから明らかなように、御史台の刑獄は新たな要素が加わることになる（後述）。

二 唐前半期の詔獄の存在様態

唐初の太宗・高宗朝には、管見の限りでは、詔獄の名を検索し得ない。前節で述べた三司および別勅推事は、勅命による刑獄ではあったが、史書はこれを詔獄とは記していない。史書が詔獄と呼ぶものが現われるのは、やはり則天武后朝からである。詔獄の名は、玄宗の開元年間一時その姿を消すが、天寶年間に再び現われる。本節では、則天武后朝から玄宗朝までを前半期として、その詔獄の様態について若干の検討を加えてみる。

(1) 則天武后朝の詔獄

則天武后が詔獄を開いたことを伝える記事は、旧唐書卷五十・刑法志に、
則天臨朝。初欲大收人望。中略。然則天嚴於用刑。屬徐敬業作乱。及豫博兵起之後。恐人心動搖。欲以威制天下。漸引酷吏。務令深文。以案刑獄。云云。
と記し、陳白玉文集卷九・書・諫用刑書には、
前略。日者東南微孽。敢謀乱常。陛下順天行誅。罪惡咸服。中略。惡其首乱唱禍。法合誅屠。將息姦源。窮其党与。遂使陛下大開詔獄。重設嚴刑。冀以懲姦。觀于天下。云云。
とあり⁸⁰、陳子昂の切諫上書の文中に、その名がみえるから、光宅元年に起った李敬業の乱を契機として、詔獄が開かれたのであろう。朝廷では、まず宰相裴炎が、この事件に連坐して詔獄に下されている。新唐書卷百十七・裴炎伝に、

徐敬業兵興。后議討之。（内史）裴炎曰。天子年長矣。不予政。故豎子有辞。今若復子明辟。賊不討而解。（監察）御史崔察曰。炎受顧託。身綏大權。聞乱不討。乃請太后歸政。此必有異図。后乃捕炎送詔獄。遣御史大夫蘇味道・侍御史魚承曄參鞠之。云云。

とみえ、内史（中書令）裴炎は李敬業の乱鎮圧には、武后が睿宗に政権を返すことが良策だと上言したため、監察御史に弾奏されて、詔獄に送られ、御史大夫蘇味道・侍御史魚承曄によって推鞠されたとある。武后が詔獄に下した裴炎を御史大夫と侍御史に推鞠せしめているのは、詔獄が御史台によって開かれていたことを推測せしめる。また、侍御史魚承曄は、詔獄を掌った酷吏の一人に数えられる人物である⁸¹。そこでまず、武后による詔獄創置の事情と御史台および酷吏との関係からみてみる。

（イ） 詔獄創置の事情

武后が高宗の皇后に冊立されたのは、永徽六年のことである。高宗は極めて凡庸な人物で、そのうえ病身であったため、間もなく武皇后が代わって国政を決裁するようになった。これより武後の権力闘争は激化する。当初、武后が権力闘争の手段として利用したのは、勅命による三司の刑獄である。新唐書卷五十六・刑法志に、

自永徽以後。武后得志。而刑濫矣。當時大獄。以尚書刑部・御史台・大理寺雜按。謂之三司。而法吏以殘酷為能。云云。

とあって、刑部・御史台・大理寺の刑法官を中心とする三司によって濫刑が行なわれたとある。そして、この三司を巧みに利用して、創業以来の強大な勢力であり、かつ最大の敵対者であった、いわゆる閹隴支配集団の中心人物の長孫無忌を朝廷から排斥している⁸⁴。新唐書卷百五・長孫無忌伝に、

前略。后既立。以無忌受賜。而不助己銜之。（中書令）許敬宗揣后指。陰使洛陽人李奉節。上無忌變事。与侍中辛茂將臨按。傳致反狀。帝驚曰。將妄人構間。殆不其然。敬宗具言。反跡已露。中略。遂下詔。削官爵封戸。以揚州都督一品俸置于黔州。中略。後数月。又詔司空李勣・中書令許敬宗・侍中辛茂將等。覆按反獄。敬宗令大理正袁公瑜・御史宋之順等。即黔州暴訊。無忌投纆卒。中略。自是。政歸武氏。云云。

とあり、高宗の顯慶四年⁸⁵、無忌は武后腹心の中書令許敬宗の誣奏によって失脚させられ、更に敬宗一派の大理正袁公瑜・御史宋之順に迫られて自殺しているのである。旧唐書卷六十五・同伝によると、大理正・御史の他に、吏部尚書李義府が加わった三司が流地の黔州に派遣されている。この三司に刑部尚書でなく、吏部尚書が加わっているのは、李義府が武後の佞臣であり、同じ尚書省の官であったことによるものであろう。しかし、三司による刑獄は、それが国家機構である以上、いつも天子の意のままに動くものではなかった。資治通鑑卷二百二・唐紀・高宗・調露元年五月壬午の条の考異に、御史台記をのせ、

鄭仁恭。本滎陽人也。自監察累遷刑部郎中。儀鳳中。明崇儼以奇術承恩寵。夜遇刺客。勅三司亟推鞠。妄承引連。坐者甚衆。高宗怒。促有司行刑。仁恭奏曰。此輩必死之囚。願假其數日之命。高宗曰。卿以為枉邪。仁恭曰。臣識慮淺短。非的以為枉。恐萬一非實。則怨氣生。遂緩之旬餘。果獲賊矣。朝廷稱之。

とあり、恩寵を受けていた明崇儼の暗殺事件を三司に命じて推鞠させ、高宗が刑の行使を急がせたのに抗して、刑部郎中鄭仁恭の慎重な審議が冤罪を防いだことがみえている。このことから明らかなように、天子といえども、三司の審議を左右することはばかりでなかったから、武后は一方的権力意志のままに仮借なく刑獄を遂行するためには、三司では自ら限界があったことを自覚していたと思われる⁸⁶。そこで武后は、帝位につくと、御史台を強化し、これによって嚴法を用いることになる。

御史台制度の変遷の中で、武后朝は、最も重大なる意義を有するものがあつた。光宅元年、帝位についた武后は、直ちに御史台の強化に着手している。御史台を肅政台と改め、新たに一台を増置して、左右二台制を採用したのである。従来の御史台を左台とし、右台にも左台に準じて御史大夫以下の同じ官員を配したのであるから、御史台の機能は倍加したといえる⁸⁷。通典卷二十四・職官・御史台・侍御史の条に、

武太后時。刑獄滋章。凡二台御史。多苛刻無恩。以誅暴為事。猜阻傾奪。更相陵構。此為弊也。

とあり、二台御史ともに苛刻に職務を遂行しているが、ことに左台御史の多くは、出身の

低いものが登用され、武後の意のままになる手足として動き、特に刑獄面における残虐な行動は、旧唐書卷百八十六上・酷吏伝に、

則天以女主臨朝。大臣未附。委政獄吏。剪除宗枝。於是。来俊臣・索元礼・万国俊・周興・丘神勣・侯思止・郭覇・王弘義之属。紛紛而出。然後。起告密之制・羅織之獄。生人屏息。莫能自固。至於懷忠蹈義。連頸就戮者。不可勝言。武后因之。坐移唐鼎。云云。

とある如く、告密の制と羅織の獄を生み、きわまる所、遂に武周革命を成功させるのである。この獄吏と呼ばれた左台御史は、ただひたすら武後の意のままに動くことによって、自らの地位の昇進を図ったのであり、史書は、彼らを酷吏として記述しているのである。この酷吏については、築山治三郎氏が「これらの酷吏二十三名のうち、その大部分が御史に任命されたことであった。すなわち法をもって苛刻残虐な行動をとり、法の命ずるところ法を超えてまであえて刻薄残忍な誅殺を起こしたものであった。彼らは卑賤出身であって身に何らの教養もなく、官歴もなく、ただ武後の召見によって中央に入り、監察御史、殿中侍御史、侍御史、御史中丞へと御史の道を歩んだ。御史でないものは、刑部侍郎とか遊撃將軍とかに用いられて刑獄を推究したものであった。そして武后が革命を起こし、反武勢力を駆逐せんため、己が意のままに操縦したもので、貴族官僚はいかんともし得なかった」と指摘せられている⁸⁹。武後の詔獄は、この酷吏が掌った刑獄であったのである。旧唐書卷百八十六上・丘神勣伝に、

復入為左金吾衛將軍。深見親委。受詔与周興・来俊臣。鞠制獄。俱号为酷吏。とあり、酷吏と呼ばれた丘神勣・周興・来俊臣が詔を受けて制獄を推鞠したとある⁹⁰。また、新唐書卷百・張知韋伝に、

（左台侍御史）張知默与監察御史王守慎・来俊臣・周興。掌詔獄。数陷大臣。云云。とあり、制獄つまり詔獄を掌った彼ら酷吏が左台侍御史および監察御史であったことがわかる。つまり、武后による詔獄の創置は、単なる天子の擅殺機関の成立を意味するだけのものでなくして、御史台に付与されていた別勅推事の機能の発展の帰結として考察すべきものが存するに思われるのである。

（ロ） 詔獄の機構

詔獄を掌ったのは御史であったから、その獄は御史台の獄をもって当てられたものと思われる。しかし、次第に機能を発揮した告密の門によって、いよいよ詔獄は盛んとなり⁹¹、別に獄が増置されるに至った。新唐書卷二百九・来俊臣伝に、

前略。武后以為諒。擢累侍御史。按詔獄。詔於麗景門。別置獄。云云。とあり、通典卷百七十・刑・峻酷の項に、

時周興・来俊臣等。受制推究大獄。乃於都城麗景門内。新置推事使院。時人謂之新開獄。云云。

とあって、洛陽城の麗景門内に別に獄を置き、これを推事使院となし、そこで詔獄を推究せしめたことがみえている⁹²。この新たに増置された獄を、時人が新開獄と呼んだとあるが、この獄は推事使院の名が示す如く、あくまでも推鞠を行なったのであり、獄は御史台の獄と同じく未決監的な存在であった。資治通鑑卷二百七・唐紀・則天后・長寿元年三月の条の「三品院」の胡註に、

先是。制獄既繁。司刑寺別置三品院。以処三品以上官之下獄者。

とあり、司刑寺（大理寺）の獄に詔獄へ下された三品官以上の三品院が置かれたことがみ

えている⁸⁰⁾。

所で、この推事使院の構成は、推事使と判官およびその属吏からなっていたようである。推事使については、新唐書卷二百九・索元礼伝に、

前略。擢游撃將軍為推使。即洛州牧院為制獄。

とあり、また、通典卷百六十九・刑・守正の項に、「推事使金吾將軍邱神勣」「推事左台監察御史盧僊」等の名がみえるから⁸¹⁾、游撃將軍・金吾衛將軍・左台御史が任じられたのである。判官については、旧唐書卷百八十六上・万国俊伝に、

前略。自司刑評事。俊臣同引為判官。天授二年。攝右台監察御史。常与俊臣同按制獄。とあり、また資治通鑑卷二百五・唐紀・則天后・長寿元年春正月の条に、詔獄を掌った来俊臣と「判官王德寿」がみえ、その胡註に、

判官。俊臣之属官也。

とある。その他、獄卒、衛士と呼ばれた属吏が置かれていたようである⁸²⁾。

（ハ）詔獄の裁判

所で、詔獄で推鞠された罪人の断刑については、やはり獄官令に従って、大理寺において断決されていたことは注目に値する。旧唐書卷九十・杜景儉伝に、

転司刑丞。天授中。与（司刑丞）徐有功・（侍御史）来俊臣・（游撃將軍）侯思止。

專理制獄。時人称之。遇徐杜者必生。遇来侯者必死。云云。

とあって、司刑丞（大理丞）の杜景儉と徐有功が酷吏の侍御史来俊臣と游撃將軍侯思止とともに詔獄を掌り、時人に「遇徐杜者必生」といわれたことがみえる。司刑丞の職掌は、「正刑之輕重」⁸³⁾あるいは「正刑名」⁸⁴⁾とあるように、刑の輕重によって刑名を定めるもので、資治通鑑卷二百四・唐紀・則天后・天授元年秋七月辛己の条に、

時法官競為深酷。唯司刑丞徐有功・杜景儉。独存平恕。中略。酷吏所誣構者。有功皆為直之。前後所活。数十百家。云云。

とあり、酷吏が誣構によって断罪するのに抗して、これを正したことがみえている。だが、それが詔獄全体に及ぼした影響は小さかった。通典卷百七十・刑・峻酷の項に、天授二年正月、御史中丞知大夫事李嗣真が酷吏による刑獄の不当を上疏した一節に、

比日獄官。一單車使推訖。萬事即定。法家随断。輕重不推。有無即時便決。不待聞奏。

此權由臣下。非審慎之法。倘有冤濫。何由可知。況乎九品之官。專命推覆。操殺生之柄。竊人主之威。按覆既不在秋官。省審復不由門下。事非可久。物情駭懼。云云。

とあり⁸⁵⁾、詔獄の刑獄が酷吏によって専断され、法家は断に随って輕重を推覆せず、刑部の案覆および門下の省審も行なわれなかったことがみえ、また、資治通鑑卷二百四・唐紀・則天后・天授二年九月乙亥の条に、

殺岐州刺史雲弘嗣。（左台御史中丞）来俊臣鞠之。不問一歟。先断其首。乃偽立案奏之。云云。

とあり⁸⁶⁾、来俊臣が推鞠するときは、自白せしめることもなく、まず首を斬って案状を偽造したことがあるとみえ、詔獄に下ったものの多くは、こうした酷吏の暴虐のために、推事使院の獄中に横死したのである。新旧唐書の酷吏伝には、推事使院の苛酷な推鞠と虚構による罪で、数多くの宗室・大臣・大将・庶僚が誅殺されたことを伝えている⁸⁷⁾。

詔獄がようやく衰えをみせるのは、武周革命をなし遂げ、新王朝の体制が確立された長寿年間のことである。同書卷二百五・唐紀・則天后・長寿元年秋八月の条には、

監察御史朝邑嚴善思。公直敢言。時告密者。不可勝数。太后亦厭其煩。命善思按問。

引虚伏罪者。八百五十餘人。羅織之党。為之不振。

とあり、告密者および羅織の党は次第に御用済みになってきていることを伝えている。そしてこのことは、詔獄の裁判形態にも現われてくる。新唐書卷百十五・狄仁傑伝に、

前略。会为来俊臣所構。捕送制獄。

とある狄仁傑が来俊臣の誣構によって詔獄に下った事件を、旧唐書卷九十四・李嶠伝は、
時酷吏来俊臣。構陷狄仁傑・李嗣眞・裴宣礼等三家。請誅之。則天使（給事中）李嶠
与大理少卿張德裕・侍御史劉憲。覆其獄。德裕等。雖知其枉。懼罪並從俊臣所奏。嶠
曰。豈有知其枉濫。而不為申明哉。中略。乃与德裕等。列其枉状。

と記している。武后は酷吏来俊臣が推鞠した詔獄を門下給事中と大理少卿および侍御史の
三司に覆審させているのである。また、資治通鑑卷二百六・唐紀・則天后・神功元年九月
甲寅の条に、

太后謂侍臣曰。頃者。周興・来俊臣按獄。多連引朝臣。云其謀反。国有常法。朕安敢
違。中間疑其不実。使近臣就獄引問。得其手状。皆自承服。朕不以為疑。自興・俊臣
死。不復聞有反者。然則前死者。不有冤邪。

とあるは、念願を達した武后の意識のちがいがいわしめていることは明らかであろう。

(2) 中宗・玄宗朝の詔獄

則天武后の武周政権が倒されて、帝位に就いた中宗は、国号を唐に復すとともに、まず、
武后の垂拱以来の酷吏二十三名の官爵を奪い、嶺南に流すことによって、民心の怨を宥め
んとした⁹⁹。しかし、武后の一族はなお残存し、更に皇后韋氏が政治に関与して、朝廷で
の紛争は続くのである。従って、酷吏は排除されたが、詔獄は廃されなかった。新唐書卷
二百九・姚紹之伝に、

中宗時。武三思丞僭不軌。（駙馬都尉）王同皎・張仲之・祖延慶等。謀殺之。事覺捕
送新開獄。詔（監察御史）姚紹之与左台大夫李承嘉按治。云云。

とあり、武氏勢力を代表する武三思の専権を憎む駙馬都尉王同皎等が、武三思謀殺を企て
て失敗し、新開獄に送られたことがみえている⁹⁹。また、資治通鑑卷二百八・唐紀・中宗
・景龍元年八月の条に、

初右台大夫蘇珣。治太子重俊之党。囚有引相王者。珣密為之申理。上乃不問。自是。
安樂公主及兵部尚書宗楚客。日夜謀譖相王。使侍御史冉祖雍。誣奏相王及太平公主。
云与重俊通謀。請收付制獄。云云。

とあって、詔獄が中宗朝一代を通じて、廷争に利用されていたことを知るのである。中宗
朝の廷争は、韋后の野心と、これに結んで失勢回復をはかった武三思をめぐって展開され、
中宗は名目上の存在にしかすぎなかった。こうしたもとでの詔獄が、則天武后の如く、強
権をもって全官僚組織の制御権を手中に握って運用されたものと、自ら性格を異にすること
とは明らかである。そのためか、旧唐書卷百一・韓思復伝に、

景龍中。累遷給事中。時左散騎常侍嚴善思。坐譖王重福事。下制獄。有司言。善思昔
嘗任汝州刺史。素与重福交遊。中略。拋状正當匿反。請從絞刑。思復駁奏曰。議獄緩
死。列聖明規。刑疑從輕。有国常典。中略。請付刑部集群官。議定奏裁。中略。有司
仍執前議。請誅之。思復又駁。中略。上納其奏。竟免善思死。配流靜州。

とあるように、詔獄における審理量刑が、給事中によって駁奏され、刑部によって覆審さ

れていることがみえていのである⁽⁴⁰⁾。

さて、「武韋の禍」と目された時期をへて玄宗の治世になると、濫刑は廃され、過去の宿縁を一掃せんとする政治が進められた。そのため、玄宗親政の開元年間には、寛刑をもって知られている。従って、詔獄の名はみられず、勅命による刑獄は、すべて三司によって行なわれている。旧唐書卷九十七・張説伝に、

前略。乃与御史大夫崔隱甫・中丞李林甫奏彈。説引術士夜解。乃受賊等状。勅宰相源乾曜・刑部尚書韋瓘・大理少卿胡珪・御史大夫崔隱甫。就尚書省鞠問。云云。

とあり、また、同書卷百五・楊慎矜伝に、

前略。李林甫令人發之。玄宗震怒。繫之於尚書省。詔刑部尚書蕭隱之。大理卿李遷・少卿楊瑋・侍御史楊釗・殿中侍御史盧鉉同鞠之。云云。

とある等は、その証例である。そして三司による推鞠が尚書省において行なわれているのは、当時の御史台の機能と連関してみると注目される傾向である。

玄宗朝の御史台は、先天二年十月、一台制に復帰している⁽⁴¹⁾。これは武后朝の二台制から一台制への縮小、あるいは機能の弱化としてとらえるべきものではないが、確かに、御史台の機能には変化がみられる。新唐書卷四十八・百官志・御史台・侍御史の条に、

其後。宰相以御史權重。建議。彈奏先白中丞・大夫。復通状中書門下。然後得奏。自是。御史之任輕矣。

とあり、御史の彈劾権は統制され、単独に天子へ彈奏することは禁じられている。そのため御史の任は軽いものになったとみえてい。これはまた、御史の刑獄権についてもいえる。唐会要卷六十・御史台の項に、御史台の獄について記し、

至開元十四年。崔隱甫為大夫。引故事。

とあり、開元十四年に至って御史台の獄は廃止されているのである。しかし一方、御史中丞による京畿地域の秩序機構の総轄、また、殿中侍御史の左右巡の兼職による京城内の秩序体制への関与等⁽⁴²⁾、その機能には新たな展開がみられるのもこの頃である。そしてその特長的なものとして、御史が地方行政の監察強化と連関して諸種の派遣官および兼帯官として重用されたことは見逃すことのできぬ傾向である。これらについては、既に先学の論考もあるので⁽⁴³⁾、ここでは省略するが、御史台の彈劾権と刑獄権の統制化の傾向と、尚書省における勅命の三司刑獄の推鞠とは無関係ではあるまい（後述）。

さて、「開元の治」に続く天宝年間に入ると、ようやく政治に倦いた玄宗は、政務を宰相李林甫に委ねた⁽⁴⁴⁾。これより朝廷は李林甫の専横するところとなり、帝権を盗用する詔獄の設置をみることになる。旧唐書卷百八十六下・吉温伝に、

会李林甫將起刑獄。除不附己者。乃引之於門。与（殿中侍御史）羅希奭同鍛鍊詔獄。

とあり、また、資治通鑑卷二百十五・唐紀・玄宗・天宝六載冬十月の条に、

李林甫屢起大獄。別置推事院於長安。以楊釗有掖庭之親。出入禁闥。所言多聽。乃引以為援。擢為御史。事有微涉東宮者。皆指摘之奏劾。付羅希奭・吉温鞠之。云云。

とある如く、李林甫が専横をはからんとする意図から刑獄を起し、殿中侍御史羅希奭や吉温とともに、詔獄の名をもって反対勢力を排斥しているのである。この詔獄が推事院を別に設置し、御史にその刑獄を掌らしめているのは、武后朝の詔獄と同じであるが、玄宗の直接の意志でなく、李林甫の権勢欲のために利用された点は異なるといえる。だが、こうした詔獄の復置と、その御史の関与とは、再び御史台の刑獄権に新たな展開をもたらすことになる。同書卷二百十七・同紀・同・天宝十四載三月の条には、

前略。揚国忠日夜求安禄山反状。使京兆尹圍其第。捕禄山客李超等。送御史台獄。譖殺之。

とあり、天宝末年には、既に御史台に獄が復置されていたことを記すとともに⁽⁴⁾、朝廷の刑獄機関として重要な役割を果たしていたことが窺知されるのである。

註

- (1) 大学衍義補卷百四・慎刑憲・制刑獄之具の「漢高后四年。絳侯周勃。有罪逮詣廷尉詔獄」の註に、

臣按。詔獄之名。始于此。然其獄猶屬之廷尉。則典其獄者。猶刑官也。其後乃有上林詔獄。則是置獄于苑囿中。若盧詔獄。則是置于少府之屬。不復典于刑官矣。夫人君奉天討。以誅有罪。乃承天意以安生人。非一己之私也。有罪者。當與衆棄之。国人皆曰可殺。然後殺焉。何至別為詔獄。以繫罪人哉。後世因之。往往於法獄之外。別為詔獄。加罪人以非法之刑。非天討之公矣。亦豈所謂與衆棄者哉。

とみえている。

- (2) 沈寄簃先生遺書・獄考参照。
 (3) 通典卷百六九・刑・守正・同年九月条、唐会要卷三十九・議刑輕重・武德九年九月条にも同内容記事がある。
 (4) 例えば、通典卷百六九・刑・守正、および唐会要卷四十・臣下守法の項をみると、貞觀元年に姦吏をやめんとして、試みに財物を送ったところが司門令史が受けたので、これを怒った太宗が死罪を命じたのに抗して、民部尚書裴矩が、

但陛下以物試之。即行極法。所謂陷人於罪。恐非道齊礼之義。

と諫め帝の従うところとなったもの。同年に大理少卿戴胄も律を無視して勅命によって死罪を命じたのに抗して、

罪不至死。不可酷濫。

と奏したものの。更に貞觀七年に殿中侍御史李乾祐が、

法令者。陛下制之於上。率土遵之於下。与天下共之。非陛下独有也。

と諫止したことが記されている。また、旧唐書卷九十八・李元紘伝には、彼が則天武后の娘、太平公主の関与した訴訟を敗訴せしめ、激しい圧力に抗して、判決文の末尾に

南山或可改移。此判終無揺動。

と大書したものの。新唐書卷百十九・賈至伝に、

律令者。太宗之律令。陛下不可以一士小材。廢祖宗大法。

とある等、さがせば多い。

なお、池田温氏「律令官制の形成」（『岩波講座・世界歴史5・古代5』所収）は、「こうした諸例に一貫して認められるのは、皇帝の擅殺権を一応承認したうえで司法官の管掌領域の相対的自立性を防衛しようとする大理寺官の志向である」と指摘されており、利光三津夫氏「裁判の歴史―律令裁判を中心に―」は、この遵法意識の中には、六朝以来の貴族階級が律令を以て自己およびその階級全体の利益を擁護する盾のごときものと考え、これによってその權益を守らんことを意図するものがあつたともいわれている。

- (5) 旧唐書卷七十・戴胄伝に、貞觀元年のこととして、吏部尚書長孫無忌が召され佩刀を解かずして閣に入ったため罪を問われたことを記し、

太宗曰。法者非朕一人之法。乃天下之法也。何得以無忌国之親戚。便欲阿之。更令重議。

とあって、太宗の法に対する態度が明らかである。また、高宗が太宗の方針を遵守しようとしたことは、旧唐書卷五十・刑法志に、

高宗即位。遵貞觀故事。務在恤刑。云云。

とあるのや、同書卷八十五・唐臨伝に、

然為国之要。在於刑法。法急則人殘。法寬則失罪。務令折中。称朕意焉。

とみえることから明らかである。

- (6) 唐の裁判機構については、日本の律令制下の裁判とも深い関連をもつことから、多くの先学により優れた論考が蓄積されているが、裁判手続規定については、学説がまちまちで必ずしも統一していない。小論では、奥村郁三氏「唐代裁判手続法」（法制史研究10）に従った。
- (7) 唐六典卷六・尚書刑部・刑部員外郎条参照。
- (8) 大理寺の事例として、例えば、新唐書卷百三・孫伏加伝、資治通鑑卷百九十六・唐紀・太宗・貞觀十七年三月条等参照。
- (9) （ ）は旧唐書卷七十六・恒山王承乾伝で補った。なお、同伝によれば、大理卿孫伏加・中書侍郎岑文本・諫議大夫褚遂良等の名がみえている。
- (10) 大三司および小三司の呼称は、官品の高低でも用いられたようである。唐会要卷七十八・諸使雜錄・大曆十四年六月三日の勅文に、
前略。有大獄。即命中丞・刑部侍郎・大理卿鞠之。謂之大三司使。又以刑部員外郎・御史・大理評事官為之。以決疑獄。謂之三司使。
とある。また、資治通鑑卷二百二十一・唐紀・肅宗・乾元二年夏四月条には、「又使御史中丞崔伯陽・刑部侍郎李曄・大理卿權猷」の三者を胡註は、「此唐制。所謂小三司也」としている。
- (11) 内藤乾吉氏「唐の三省」（『中国法制史考証』所収）参照。
- (12) 唐会要卷四十・君上慎恤・貞觀三年三月五日条には、
自今天下大辟罪。皆中書門下四品已上。及尚書議之。
とあり、四品已上とする。
- (13) 三司陳訴の制がいつ頃から始まったかは明らかでないが、資治通鑑卷百九十三・唐紀・太宗・貞觀四年五月辛巳条に、
詔自今訟者。有經尚書省判不服。聽於東宮上啓。委太子裁決。若仍不服。然後聞奏。
とあり、三司陳訴が東宮上啓となっているから、太宗の貞觀四年頃は、まだ制度化されていなかったとみてよいであろう。
- (14) 旧唐書卷四十四・職官志・御史台によれば、御史中丞の官品は、会昌二年十二月、実質的な台長となった際に、正四品下となっている。
- (15) 唐六典卷八・門下省・給事中条に同内容記事がある。
- (16) 御史台については、既に少なからざる研究がある。近年のもので、特に小論で参考にしたものを挙げておく、築山治三郎氏「唐代政治制度の研究」、八重津洋平氏「唐代御史制度について、1・2」（法と政治21—3・22—3）なお、特に推事と弾劾について論述されたものに、根本誠氏「因話録による御史台について」（早稲田大学大学院文学研究科紀要15）がある。
- (17) 通典卷二十四・職官・御史台・侍御史条に、
侍御史之職有四。推（推者掌推鞠也）。彈（掌彈劾）。公廨（知公廨事）。雜事（台事悉総判之）。
とある。
- (18) 新唐書卷四十八・百官志・御史台項参照。
- (19) 監察御史の推事については、例えば、冊府元龜卷五百二十上・憲官部・彈劾・韋仁約、旧唐書卷百八十五下・李尚隱伝等参照。
- (20) なお、陳子昂年譜によれば、この上書は垂拱二年三月としている。
- (21) 酷吏については、旧唐書卷百八十六上・酷使伝に二十三名が挙げられている。
- (22) 外山軍治氏「則天武后」（中央公論社）、松井秀一氏「則天武後の擁立をめぐる」（北大

- 史学11), 松島才次郎氏「則天武後の称制と篡奪」(信州大学教育学部研究論集19)
- (23) 旧唐書卷六十五・長孫無忌伝参照。
- (24) 旧唐書卷八十七・劉祥之伝に、宰相であった彼が誣告されたことを記し、
則天特令肅州刺史王本立。推鞠其事。本立宣勅示祥之。祥之曰。不經鳳閣・鸞台。何名為勅。
則天大怒。以為拒捍制使。乃賜死於家。
とあるは、則天武後の法的思想を知る好例である。
- (25) 註(16)参照。
- (26) 註(16), 同氏論文参照。
- (27) 制獄は詔獄と同じである。唐会要卷五十四・省号上・中書省の項に、
旧制。冊書詔勅。總曰詔。天授元年。避諱改詔曰制。云云。
とある。
- (28) 新唐書卷二百九・酷吏伝、旧唐書卷百八十六上・同伝参照。
- (29) この推事使院の創置は、唐会要卷四十一・酷吏では、載初元年九月のこととする。また、これの名称は、新唐書卷二百九・索元礼伝には、「洛州牧院」とあり、同書卷百十三・徐有功伝には、「総監牧院諸獄」とある。また、通典卷百六十九・刑・守正には、「新開総監之内。洛州牧院之中。通成秘獄。互為峻網塞戸。云云」とある。
- (30) 新唐書卷百十三・張文琮伝には、司刑三品院とする。また、この頃には、刑部にも獄が置かれていたことは、唐大詔令集卷八十二・刑法・「減大理丞龐秋官獄勅」(万歳登封元年十月十一日)によって知られる。
- (31) 通典卷百六十九・刑・守正には、その他に、推事使杜無二・顧仲琰の名がみえる。
- (32) 旧唐書卷百八十六上・來俊臣伝、唐会要卷四十一・酷吏参照。
- (33) 新唐書卷四十八・百官志・大理寺参照。
- (34) 唐六典卷十八・大理寺参照。
- (35) 唐会要卷四十一・酷吏、資治通鑑卷二百四・唐紀・則天后・同年月条にも同内容記事がある。
- (36) 資治通鑑卷二百四・唐紀・則天后・同年月条の胡註に、
獄辭之出於囚口者為歟。歟誠也。言所吐者。皆誠實也。案考也。掘也。獄辭之成者曰案。言可考掘也。凡官文書可考掘者。皆曰案。
とある。
- (37) 推事使院での残虐きままる拷問については、資治通鑑卷二百三・唐紀・則天后・垂拱二年三月戊申条、旧唐書卷五十・刑法志参照。また、詔獄で誅殺された宗室・大臣・大将・庶僚達の名は、廿二史劄記卷十九・武后之忍にみえている。
- (38) 旧唐書卷五十・刑法志、同書卷百八十六上・酷吏伝、唐会要卷四十一・酷吏・神龍元年三月二日条等参照。
- (39) 旧唐書卷百八十六下・同伝には「按於新開門内」とする。
- (40) 旧唐書卷百九十一・嚴善思伝によれば、この事件は睿宗の景雲元年のこととする。
- (41) 唐会要卷六十・御史台条参照。
- (42) 拙稿「唐都長安城の坊制と治安機構」(九州大学東洋史論集4)参照。
- (43) 註(16)参照。
- (44) 資治通鑑卷二百十六・唐紀・玄宗・天載十一載十一月乙卯条参照。
- (45) 唐会要卷六十・御史台の項には、「以後。恐罪人於大理寺隔街来往。致有漏洩獄情。遂於台中諸院寄禁。至今不改」とあり、台獄廃止以後、間もなく獄が復置されたようであるが、その年代は不明である。

(1976年10月30日)